

思い出と近況

濱田 紘（3組）



《高校時代の思い出》

当時は野球部が活躍しており、県内では常に決勝戦へ進んでおり、昼食時間には上級生の応援団長の指導の下に熱心な応援練習を行っていた。みんなの声が小さいと応援団長の厳しい声で気合を入れられていた。

県内の準決勝以上の試合になると、鴨池野球場へ応援に出かけていたが、かんかん照りの炎天下、選手の皆さんはもちろん大変であるが、応援している我々も熱い石段に腰掛けて、汗を流しながら飲み水も無しに熱心に声を張り上げて応援していたが、幸いにも日射病などになった人は居なかった様に思う。

私は南州神社のすぐ近くに下宿していたが、同じ下宿屋に徳之島出身の人（玉竜高校）や財部町出身の人（鶴丸高校）が居り、彼等（二人共一年先輩）と一緒に夕食後は、三十分〜一時間程度、神社内をよく散歩したりキャッチボールしたりして遊ぶのが楽しみであった。

この下宿屋のすぐ隣には岸尾投手の自宅があり、彼は夕方によくバットの素振りをしており、力強い素振りを見かけていたが、我々とはレベルの違いでキャッチボール（軟式のボール）に誘う事は無かった。

下宿屋の近くに稲森俊英君（三組）の家があり、彼とはよく磯の海水浴場へ遊びに行っていた。海水浴場へ行く時はいつも下駄履きだったが、アスファルトの舗装道路は強い直射日光で溶けており、下駄にくっつくので歩き難かったが、特に海水浴帰りには疲れている事もあり、アスファルトのタールが気になって仕方なかった。

夏休み前には高校全体で磯海水浴場での遠泳の練習があり、その夏最後の日には桜島からの遠泳があり、私も二年生の時、その遠泳に参加したが、なんとか磯まで泳ぎ着いた。この遠泳は二列に並んで泳ぐのだが、私の前を泳ぐ人は非常に上手な泳者で、その人が一蹴りするとスイーと前進するのだが、その一蹴りした波が私の

顔に当り非常に泳ぎにくかった。

途中、ボートが近づいて来て『カンバシ』と声援をしてくれており、やっこの思いで磯までたどり着いた時には、倒れながら砂浜に仰向けになっていた。今は松原小学校の児童もこの遠泳をしているようであるが、小学生で良く泳げるものだと感心する。

《サラリーマン時代の思い出》

広島造船所に約十一年間勤務したが、造船所のスケールの大きさにびっくりした。入社一年目は研修期間であり、この間、各事業所へ二〜三週間の研修に出かけるのだが、研修で長崎の造船所へ行き、長崎市のグラバー邸から造船所をバックに写した時の写真である。

造船所勤務と言っても船の設計をするわけではなく、化学工学出身であり、化学工場などの化学プラントの設計に携わっていた。二十九歳の時、初めての海外出張でインドの肥料工場建設のため、約一年間の出張に出かけた。



まず、広島空港からプロペラ機で羽田へ出発したのだが、飛行機に乗るのが初めてで、広島空港を離陸してすぐに左へ急旋回し、左側の海が垂直に立ち上がった時には、落ちるのではないかとヒヤヒヤした思いがある。

当時、広島空港は、鹿児島島の鴨池空港と同じく、滑走路の長さが千五百mしかなく、ジェット機は発着できなかった。広島空港は造船所のすぐ横にあったので、出発の時は会社の先輩や同僚達数人が見送りに来てくれた。

出張先のこの肥料工場はインドのマドラス市にあり、インドの他の都市と違い、広々とした町で、樹木に囲まれた緑の多いきれいな町並みで、道路も広くゆったりとした町であった。



最初の六ヶ月間は町のホテルに宿泊しており、車で約一時間（百kmの距離）かけて出勤していたが、後半は工場近くの社宅（コロー）にコックやスイーパー（掃除人）付きで生活していた。

ここは、工場の上層部の人達が住む社宅で約二十棟あり、どの社宅にもコックやスイーパーが居り、昼間は約四十℃を越える暑さのため、コック達の子供達は庭の木陰の砂の上に、直に昼寝をしていたのを良く見かけた。

肥料工場の建設が終わり、一ヶ月間の試験運転をするのだが、製品のアンモニアや硫酸が出来てくるが、その真っ白い硫酸がベルトコンベアーに乗って出てきた時にはその感激は計り知れないものだった。自分が設計したプラントからきれいな製品が本当に出来てきたと大感激し、つい涙がでてきた。

この工場の建設も色々問題があり、夜中に叩き起されて現場へ出て行ったりと苦労も多かったが今思つて懐かしい。

サラリーマン時代、色々な国へ出張させられたが、どの出張も苦勞の多い緊張する出張ばかりだった。しかし、ただ一つ、南太平洋のパラオへの出張は我が人生で一番楽しい出張と言える。

と言つのは、出張期間中、調査のため米軍のセスナ機をチャーターし、上空から島全体を調査したり、夕方は毎日の様に海水浴を楽しんだりで、遊びが半分以上の気楽な調査出張の一週間だった。

《近況》

鹿児島島に帰ってきて約十年が過ぎた。東京本社に勤務していた四十歳の時、硬式テニスを始めたが、今も川内市のテニスクラブでテニスを楽しんでいる。

しかし、二年前に膝を痛めて約一カ年休んでおり、昨年末から再びテニスを楽しめる様になった。

私の趣味は、このテニスと四年前から始めた畑仕事である。以前、田圃だったところを改良し、水はけの良い畑にしてから果物などの苗木を植えたのだが、その苗木の一部が今年から花を付けるようになった。

苗木を植えては枯らし、また植えるなど繰り返しであるが、ミカン、柿、ピワ、梨など、全部で九種類で、各四〜五本ずつ植えており、これ等が実るのを楽しみに

見廻っている。

野菜や苗木を育てるのも非常に難しく、技術士仲間と農業の専門家に時々聞きながら農作業を進めているが、何とか物になりそうになってきた。

この様に、現在の趣味のテニスと農作業に明け暮れているが、二〇〇六年四月に二組の阿多睦雄君など友人数人が霧島に登らなかつたか誘ってくれたので、自信は無かつたが参加してみた。

この写真はその時の韓国岳での写真で、やっこの思いで登る事が出来、ここで下山したが、阿多君など数人の元気者は、さらに高千穂へと登っていった。

最近、少し耳も遠くなり、体に少しづつ衰えを感じるようになったが、出来るだけ長生き出来るように健康維持に努めて行きたいと思っている。



八期通信アーカイブス

2004年 第10号
鈴木 恵美子（4組）



面倒を見過ぎて本人の自力を奪ってしまうのかもしれない。厳しかった母が徐々に可愛いおばあちゃんになっていき、幼児が親を慕うように頼りにされていた。

ある夜、子ども返りしていた母は、甘味の袋を持ち、一口に入れて味わいながら歩いていたが、その場に声も無く、フワッと倒れてそのままだった。本人も家族もそのまま逝ってしまう等と誰も思わず、88歳の日常が続くとばかり思っていた。

今にして思えば、好物の甘味を味わいつつ、美味しいなと思いつつ、逝ったのであろうか。何という、いい往生だったかと思う。

何年も薬は飲まず、医師に診てもらわなくても、穏やかに過ごしていた。病院は、ベッドが自分の居場所だったが、自宅なら歩ける範囲全て、見るもの聞くもの全てが、自分の居場所だと思う。

気がつくと、自分もいい年齢になっている。おじいちゃんから引き継いだお店をそろそろ終りにしても許してもらえるかなと、仏前で問答している事がある。

少し自由な時間を持ち、やりたかった事や、行きたかった所へ夫と共に行きたいと思うこの頃である。